

武蔵野日曜集会

何処から何処へ

――ヨハネ伝第8章12～30節――

1984年7月8日（武蔵野）

小池辰雄

キリスト自身が光体 靈然神然 破れ切った世界を与えているのが十字架「中」の世界
どこからどこへ どこに 私と一緒にパラダイスだ 死から生命に キリストよりキリストへ

【ヨハネ8・12～30】

12 斯^{かく}てイエスまた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は暗^{くら}き中を歩まず、生命の光を得べし』¹³ パリサイ人ら言う『なんじは己につきて証^{あかし}す、なんじの証は真^{まこと}ならず』¹⁴ イエス答えて言い給う『われ自ら己につきて証すとも我が証は真なり、我は何処^{いずこ}より来^{きた}り何処に往くを知る故なり。汝ら是我が何処より来り、何処に往くを知らず。¹⁵ なんじらは肉によりて審^{さば}く、我は誰をも審かず。¹⁶ されど我もし審かば、我が審判は真なり、我は一人ならず、我と我を遣し給いし者と偕^{とも}なるに因る。¹⁷ また汝らの律法に、二人の証は真なりと録されたり。¹⁸ 我みずから己につきて証をなし、我を遣し給いし父も我につきて証をなし給う』¹⁹ ここに彼ら言う『なんじの父は何処にあるか』イエス答え給う『なんじらは我をも我が父をも知らず、我を知りしならば、我が父をも知りしならん』²⁰ イエス宮の内にて教えし時これらの事を賽銭^{さいせん}函^{はこ}の傍^{かたわ}らにて語り給いしが、彼の時いまだ到らぬ故に、誰も捕うる者なかりき。

21 斯てまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら来ること能わす』²² ユダヤ人ら言う『わが往く処に汝ら来ること能わす』と云えるは、自殺^{じそく}せんとか』²³ イエス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我はこの世より出でず。²⁴ 之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫^{それ}なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』²⁵ 彼ら言う『なんじは誰なるか』イエス言い給う『われは正しく汝らに告げ来りし所の者なり。²⁶ われ汝らに就きて語るべきこと審くべきこと多し、而して我を遣し給いし者は真なり、我は彼に聴きしその事を世に告ぐるなり』²⁷ これは父をさして言い給えるを、彼らは悟らざりき。²⁸ 爰^{こゝ}にイエス言い給



う『なんじら人の子を挙げしのち、我の夫なるを知り、又わが己によりて何事をも為さず、ただ父の我に教え給いしごとく、此等のことを語りたるを知らん。』²⁹ 我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意に適うことを行うによりて、我を独おき給わず』³⁰ 此等のことを語り給えるとき、多くの人々イエスを信じたり。

●キリスト自身が光体

¹² 斯てイエスまた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし』¹³ パリサイ人ら言う『なんじは己につきて証す、なんじの証は真ならず』¹⁴ イエス答えて言い給う『われ自ら己につきて証すとも我が証は真なり、我は何処より来り何処に往くを知る故なり。汝ら是我が何処より来り、何処に往くを知らず。』¹⁵ なんじらは肉によりて審く、我は誰をも審かず。』¹⁶ されど我もし審かば、我が審判は真なり、我は一人ならず、我と我を遣し給いし者と偕なるに因る。』¹⁷ また汝らの律法に、二人の証は真なりと録されたり。』¹⁸ 我みずから己につきて証をなし、我を遣し給いし父も我につきて証をなし給う』¹⁹ ここに彼ら言う『なんじの父は何処にあるか』イエス答え給う『なんじらは我をも我が父をも知らず、我を知りしならば、我が父をも知りしならん』²⁰ イエス宮の内にて教えし時これらの事を賽銭函の傍らにて語り給いしが、彼の時いまだ到らぬ故に、誰も捕うる者なかりき。

相変わらず、次元が違う問答をするわけです。証のことについては、「汝らの律法に」とキリストが17節で言っておられるように、申命記17章を開きますと、

『⁵ 汝その悪しき事を行える男または女を汝の門に曳いだし石をもてその男または女を撃ち殺すべし。』⁶ 殺すべき者は二人または三人の証人の口に依てこれを殺すべし。唯一人の証人の口のみをもて之を殺すことは為すべからず。』(申

命記17・5～6)

ということ、証人は二人、三人要するということなのです。同じ19章にも出てますし、レビ記20章にもあります。旧約にはいろんな決まりがある。それだからすぐこういったような質問をするわけです。

「われは世の光なり」

と。ヨハネ伝でいう「世」というのはもちろん罪の世のことです。罪はまた闇と連想されるわけです。闇に対するのは光です。太陽が出てくると、闇は消えて、光の世界になるわけですね。昼と夜。闇の世界というのは、光がないととにかく闇になってしまう。光がくると闇が消えていく。これは消えていくんですね。どこかへ排除されるのではなくて、な



なくなってしまうわけです。だから、「私は世の光なり」ということは、世の闇をみな消してしまふ、即ち、罪の世界を光の世界に、義の世界に、愛の世界に変える者だということ。そういう恵みの力を持っているわけです。「自分は世の光である」と仰つて、また私たちに對して

「汝らは世の光である」

と、マタイ伝にも出ていますが、「地の塩」とか、「世の光」とか。ですから、世の光というのは非常に大事な内容なわけです。

「我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし」

と。今度は、「生命の光」と言う。太陽の光は我々に生命を与える。地上の生きとし生けるものはみな太陽の光熱によるわけです。熱を持っている。光、生命、そして、恵みは愛です。みんなLですよ。ライト（光）、ライフ（生）、ラブ（愛）の、三つの「エル」がある。3Lという。三位一体と言いますが、正にこれは3L一如なんです。そういう消息ですね。

「我に従う者は」という。「従う」と言つたつて、キリストと一緒に歩くわけです。「光の中を歩め」という言葉もありますね。人生は旅路ですが、このキリストと一緒に歩く。エマオの途上のように必ずキリストと一緒にいてくださるが、うっかりすると皆忘れているわけです。キリストという灯火を持った人と一緒に歩かないと、暗くなってしまう。キリスト自身が光体、光の体からだですから。

●靈然神然

13 パリサイ人ら言う『なんじは己につきて証す、なんじの証は真まことならず』

パリサイが言いそうなことですね。キリストの証というのは告白なんです。キリストは神さまからいただいたもの、神さまにおいて在るところのもの、それを言わないではいられない。告白を上からの迫りでもつて言わざるをえない。証しようなんて言つて証しているのではない。言わざるをえないところの告白が自ずから証言であるわけです。考えてもを言っているのではない。鳥が鳴かざるを得ないように、歌わざるを得ないように。そういう神からの行為、神によるところの行為、神によるところの、神から賜っている言葉、これはみんな証なんです。よ、キリストのは。全部告白なんです。行為的告白であるし、言的、言語的告白である。そういうように自ずおのから現れている。天的必然で自由に言わざるを得ない。この「ざるを得ない」というのが一番大事な言葉です。そういう心境が、そういう現実がパリサイには分らない。すぐ律法でくる。

「旧約にはこうある」

なんてなわけですね。もう、彼らの律法なんていうものは死んでいるんです。

「儀文は殺し、靈は活かす」



とパウロが言った、その律法が儀文になってしまっている。本当は律法の根本精神はキリストはつかんでいるんだけど。だから、何でもキリストの言うことは躓きになる。することも躓きになる。旧約の律法それ自身がキリストには超律法になってしまっているから、律法にこだわっている連中は躓くわけです。

「二人で言っているからダメだ。そんなものは真ではない」と。

14 イエス答えて言い給う『われ自ら己につきて証すとも我が証は真なり、我は何処より来り何処に往くを知る故なり。』

これですよ、「何処よりきたり」と。

「私は神さまから来ているんだから、また神さまへ戻っていく」

と。神さまと円環関係になってグルグル回っている。

「神の許へ還つたり、神の許から出てきたり、それが私の生活だ。そんなことはパ
リサイ人の君たちにはわからんだろう」

というわけです。やむを得ずして語っている。やむを得ずして為している。それは天然のごとくに。雨が降れば地面は濡れる。みんなこれはやむを得ずしてそうなる。天然、自然。私はよく、キリストのは靈然という。もうひとつ、神然というのがある。全くその神然の世界なんだ、キリストは。こんな言葉はあまり使わないかもしれないけれども。キリストは正にこの靈然神然の方です。

「我と父とは一つなり」

と。そういう現実が本当の信仰の現実だということを、プロテスタントはヘタすると、なにか二段構えになってしまっている。私はカトリックのことはよく知らないけれども、カトリックも二段構えが多いでしょうね。そうでない素晴らしい方ももちろんいます。

●破れ切った世界を与えているのが十字架

キリストは全く神という大きな根源の光を受けているんです。これを全身に受けているから、キリスト自身が光体となっている。

「我は世の光なり。なんとすれば、神はその光の光源であるから」

と。我々は「神」と言いながら、これはすぐ我々においては「キリスト」ですよ。「主」です。いきなり「神」というわけにいかない。このキリストの中に自分を入れていけば、

「汝らは世の光なり」

というのは、

「はい、そうです。あなたが私の中に来てくださったから、光でございます
ということ。」

「だいたい修養したから少し光ってきました」

なんて、そんなのじゃない。そんなのはすぐまた懷中電灯みたいにダメになる。こちらは



光でも何でもない。

窓を開けると、この主なる光が入ってきて、ここで光つてくださるから、影がなくなる。法然が、煩惱の影があつてどうにもならんと。とうとう「南無阿弥陀仏」になつたけれども。その煩惱の影が、中に光がくると消えてしまふ、というわけです。修養でも何でもない。

だから、光がくるためには自分が本当に破れなければダメですよ。整っているような顔したらダメなんです。自分というものは本当に破れ切らなくては。ところが、なかなか破れ切れない。この破れ切つた世界を与えているのが、この十字架なんです。そんなことは、パリサイ人――律法を非常に誇っているようなご連中――には分らない。

汝らは我が何処より来り、何処に往くを知らず。

「肉」というのは、人間的な自己本位を「肉」という。自分の義、自分の知識、自分の行い、何でも自分が立っているのが「肉」なんです。「霊」というのは、キリスト・神を立てるのが「霊」。非常に違う。肉は天動説、霊の方は地動説。コペルニクスの転回をしなければダメなんです。福音の世界は地動説に、神さまの周りを、キリストの周りをグルグル回るようになる。

¹⁵ なんじらは肉によりて審く、我は誰をも審かず。¹⁶ されど我もし審かば、

我が審判は真なり、

「真」というのは「アレテイヤ」と同じ系統の字です。もともと、原語はギリシア語だなんて言つたつて、キリストはギリシア語で仰つたのではない。みんなこれはヘブライ語ですから。

「誰も審かない」という。8章11節に、

「『女いう』『主よ、誰もなし』イエス言い給う『われも汝を罪せじ、往け、こ

の後ふたたび罪を犯すな』」（ヨハネ8・11）

とある。姦淫の現行犯で捕まつた女性に

「お前たちのうちで石を投げる者があつたら投げてみる」

とイエスが言つたら、みんなコソコソ逃げて行つてしまつた。

「私もお前を審かないよ」

と。キリストは一切の審判を十字架で受けとつてしまつた。我々は十字架がなかったら、審かれて、そして、みんな死ななければならない。永遠の死の中に入つて行かなければならない。ところが、我々は十字架で贖われましたから。キリストは一切の審判を自ら引き受けてしまつた。

「我も汝を罪せじ」

とは、そういう深い言葉です。全部担つてしまふ。だから、贖いの絶対恩寵を受けとらなかつたら、今度は本当の審判にあう。これは黙示録に出てくる。「第二の死」という。恵みを受けとりそこなうほど恐ろしいことはない。十字架の他いずこへ行くかと。



●「中」の世界

審かない。けれども、審けばそれは本当だ。それは私は自分の考えで審くのではないよと。

我は一人ならず、我と我を遣し給いし者と偕なるに因る。

父と我とは一緒なんだ。共にある。いや実に本当は、中にある。共在、内在者だと。

「汝ら、我に居れ。我れ汝らに居らん」

と、ヨハネ伝15章以下にある、「居る、居る」という言葉がみんなこの「中」の世界です。だから、私は一人で審くのではない。ちゃんとお前たちが言っているとおり二人なんだと。「証人は二人だ」と一生懸命で言っているけれども、実は私だつて二人なんだよというわけです。

「我は一人ならず。我を遣し給いし者と偕なるに因る」

と。「遣し給いし者」とはよく仰る言葉です。使者である。使い、アンゲロスだと。

17 また汝らの律法に、二人の証は真なりと録されたり。18 我みずから己につきて証をなし、我を遣し給いし父も我につきて証をなし給う」

神さまと私はお互いにちゃんと、相互的にそういうように心が、魂が通じているわけだと。

19 ここに彼ら言う『なんじの父は何処にあるか』

ヨセフはどこに在るか、くらいの気持で聞いたんでしょね。

イエス答え給う『なんじらは我をも我が父をも知らず、我を知りしならば、

我が父をも知りしならん』

私がまだ分かっていないねと。ピリポやトマスとの問答もあります。なにしろ、

「ナザレのイエスは近頃おかしなことを言ったりしてたりしているが」

なんて言つて、近い人がかえつて分からない。もう十二歳のときから、キリストは「父」というのは神さまのことを言つてらつしやる。この「父」という言葉は蹟く。何か偶像的なものを考えてみたり。仏教の人はそれにすぐ蹟く。すぐということもないかもしれないけれども。霊的な実在者を最も身親しく呼ぶ言葉として、「父」としか言えない。霊的にして人格的ということとは離すことができない。ダニエル書に

「人の子」

という言葉がある。あの「人の子」というのは実はキリストの暗号ですよ。

「天にまします我らの父よ」

という、主の祈りの「天」というのは霊界のことです。

20 イエス宮の内にて教えし時これらの事を賽銭函の傍らにて語り給いしが、

彼の時いまだ到らぬ故に、誰も捕うる者なかりき。

「彼の時」とは時々出てきます。

「わが時は未だ来らず」

とか。彼が十字架にかかり、十字架・復活の重大な時を「彼の時」という。

21 斯てまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己が罪



のうちに死なん、

これは恐ろしいですね。

わが往くところに汝ら来ること能わず』

「われは往く、往く」と言っておられる。往くも帰るも本当は同じことだ。尋ねたつてそれはダメだ、罪のうちに死ぬと。

²² ユダヤ人ら言う『わが往く処に汝ら来ること能わず』と云えるは、自殺せんとてか』

大変なことだ。そういうことを思うんですね。ヨハネ伝7章のところにも、

「³⁵ 爰にユダヤ人ら互に言う『この人われらの逢い得ぬいずこに往かんとするか、ギリシヤ人のうちに散りおる者に往きてギリシヤ人を教えんとするか。

なんてやっているわけだ。

³⁶ その言に「なんじら我を尋ねん、然れど逢わざるべし、汝ら我がおる処に往くこと能わず」と云えるは何ぞや』（ヨハネ7・35～36）

と。前の方でも同じようなことを言ってます。

²³ イエス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我はこの世より出でず。²⁴ 之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』

これは非常に恐ろしい言葉です。お前たちは下から出てきて、私は上から出てきた。お前たちは地の子だ、私は天の子なんだと。天地霄壤しやうじやうの差であるというわけだ。

●どこからどうへ

これはヨハネ伝3章を見てください。ニコデモとの会話のところではつきり言っている。

「ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、

これは少しはキリストのことを多少感じている。

ユダヤ人の宰つかさどなり。

サンヘドリング、衆議所の議員です。

² 夜イエスの許に來りて

他のやつに分らないように夜やつてきた。

言う『ラビ、我らは汝の神より来る師なるを知る。神もし偕に在さずば、汝が行うこれらの徴は誰もなし能わぬなり』

これは正しい答案をそこで言ったわけだ。

³ イエス答えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わず』

この「新たに」という言葉は、「上から」とも言える「アノーテン」という字です。「上から



生まれなければ」と。けれども、その「新たに」の気持が分からないものですから、

⁴ ニコデモ言う『人はや老いぬれば、争^いで生まるる事を得んや、再び母の胎に入りて生まるることを得んや』

と、相変わらずこのニコデモなんていうのはバカなことを言っているわけです。

⁵ イエス答へ給う『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊によりて生まれずば、神の国に入るに能はず。』

「水」は悔い改めの水のバプテスマです。「霊」は聖霊のバプテスマ。水は洗礼のヨハネがやったけれども、霊はキリストがなさる。これはペンテコステで始まった。地上にいらつしやるときは、この霊で生まれることはなさらなかった。それは十字架以前だから。「十字架の贖罪を通らなければ聖霊は与えない」ということは、キリストの厳然たる順序ですからね。
⁶ 肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。
このことはコリント前書15章でパウロが同じようなことを言っています。

⁷ なんじら新^{あらた}に生まるべしと我が汝に言いしを怪しむな。

「上から生まれなければどうしてもダメだ」という、この「べし」は非常に強い「べし」です。「デイ」という字ですが。

⁸ 風は己が好むところに吹く、

「風」という字と「霊」という字はギリシア語では同じです。

汝その声を聞けども、何処^{いずこ}より来り何処へ往くを知らず。

これも「何処より何処へ」「どこからどこへ」だ。

すべて霊によりて生まるる者も斯のごとし』(ヨハネ3:1～8)

新生しなければ、そして、

「聖霊を受けなければキリスト者ではない」

と、パウロが言っているとおりです。新生、天^{てん}生^{せい}と言ってもいい。天から、上から生まれなければと。

「私の信仰はまだうすいから、もつと深くしなければ」

とか言つて、自分の信仰というものをサムシングに思つて、一生懸命で「信仰、信仰」とやっている。くたびれてしまうよ、そんなことをしたら。

「下からではなくて、お前たちも私と同じように上から生まれなさい」

と、キリストは仰つていらつしやる。「上から生まれろ」という言葉は、

「聖霊を受ける」

ということです。聖霊を受けたら、新たに生まれる。そのためにはまず、死ななければダメだと。新生するためには死ななければダメだ、この世に死ななくては。みんなそれがないんだ、大死一番なんていうけれども。悟つたようなことを言うけれども、それはダメですよ。これは十字架が私たちに死を賜っている。生まれつきの我というものに、



「我れキリストと共に十字架せられたり。我れもはや生くるにあらず」

とパウロが言ったでしょ。あのガラテヤ書2章20節はプロテスタントの大好きな命題なんだよな。けれども、それが観念になっっているから、観念ではいつまでたっても始まらない。

「我れキリストと共に十字架せられたり」

と、本当にその世界に祈り入らなくては。そうしたら俄然、聖霊が来るんです。そうすると、新生する。

新生はいかにして可能であるか。キリストの十字架という大恩寵を無条件で受けること。無条件で受けとればいいのに、なにか条件付けているから、みんなおかしいことになるんですよ。「まだ私の信仰は」なんて言っているから。「信仰なんかもう棄てなさい、絶信しなさい」と私は言う。絶信の信の世界に入る。そうしたら俄然、聖霊が来る。

もちろん我々は、相対的人間小池は、死に至るまで罪びとにすぎません。なにも聖人でも何でもない。ただし、そのガタガタな私の中に、ガタガタでない世界がはつきり来ている。これは誰が何と言おうと来ている。この十字架で御霊が来ている。これが原動力になって、躓いても転んでもなお私を前進させてやまざるところの、光であり、力であり、生命であり、愛である。これが御霊の世界です。これが「新たに生まれる」ということです。

● ぶいじ

ギリシア語で「どこから、どこへ」「ポテン、プー」というのが所々に出てくるでしょ。「どこに」はここでは言っていない。キリストは「どこから、どこかへ」をさかんに言ってるんだけれども、キリストは本当は隠れた「どこに」を持っていらつしやる。

「父のもとに、父と共に」

これが「どこに」です。

「いずこに」は、非常に大事なのは創世記3章9節に書いてある。アダムとイブが禁断の果を食べて隠れてしまった。そのときに、神さまが

「汝、何処におるや」

と言われた。

「9 エホバ神 アダムを召て之に言いたまいけるは、汝は何処におるや。10 彼い

いけるは我園の中に汝の声を聞き、裸体なるにより懼れて身を匿せりと。」(創

世記3・9～10)

創世記3章9節は非常に大事な問いなんです。「どこに」と。神さまから隠れて木の陰にいた。それは闇の中にいた。ダメだよ、光の中にいない。神さまの前に出れば、光の中に入るのにさ。神さまから離れたから、「どこに」いるか?」と問われた。「どこに」が本当に、

「あなたの御前に、あなたと共に、あなたの中に」

ということでなければ。一番大事なのは、「あなたの中に」です。「イン」の世界です。



「我れ汝のうちに、汝わがうちに」

とパウロがさんざん言っている。そういう角度の言葉がパウロの書簡の中に164回あると、ダイスマンが数えた。ダイスマンの『パウロス』というのは素晴らしい本です。パウロの信仰の現実——ヨハネもペテロもみんなそうです——使徒たちは、言ったりしたりすることや性格もいろいろ違っていったって、共通なのはみな「キリストの中に」という世界を持っていた。この「中に」の世界を持たないようなのが、大体の今のキリスト教の傾向です。旧約聖書は「共に」が多い。新約にくると、「中に」の世界が入ってくる。それは聖霊が来たから。

「汝、何処におるや」

「私はあなたの中におります。あなたの懐の中にいます。転がっても、あなたのみ腕の中ですよ」

と、そう答えないとね。

というのは、本当に十字架を、贖いを徹底的に受ければ、こちらがどうのこうのではない。ダメなやつほど神さまは捕まえてしまう。

「だいぶ良くなってきましたから、中へ入ってきました」

なんて、そうじゃない。恵みの世界というのは無条件の世界だからね。私はしょっちゅう言っているんだ。無というのは無条件です。この無は虚無ではない。無条件の世界、無条件界です。無私。私の無い世界。だから、この無はまた、即無限無量です。「無量寿無量光」なんて言うね。「南無阿弥陀仏」も「南無妙法蓮華経」もみんなこれは福音が全部持っている。無量寿無量光はこの聖霊の世界ですから。「永遠の生命」という。

そういう「いつ、どこに」とは、

「今、汝のうちに」

ということ。「どこから」は過去の世界。「どこへ」は未来の世界——未来（未だ来らず）より将来（将来に来んとする）の方がいいね——将来の世界です。過去・現在（現今）・将来。神の国は将来に来らんとしている。どこから、どこに、どこへ。一番大事なのは、この「どこに」を持つていなければダメです。「どこから」来たってダメです。これが信・愛・望の世界だ。愛は現在です。キリストに捕まっているから、愛の力の中にあるということ。

「天国は汝らの中にあり」

とキリストは言われた。これが永遠の現在です。「どこに」ということ。

キリストは、

「神から、神と共に、神のうちに、また神へ」

と。これが

「我、何処より来り、何処へ往く」

という、そのはつきりした答えであります。



「我はこの世より出でず、アブラハムよりも前に在りしなり」と言われた。

「^{はじめ}太初に言あり。言は神と偕にあり」

というヨハネ伝の最初の句がこれです。

霊なるキリストはナザレ人として現れた。まあそんなことは、普通の人にはお伽話^{とき}か何かでしょうね。我々にはこれほどありがたいもの凄い現実はない。それはもう、キリストに降参するまでは、その世界に入れないですよ。分かるの分からないのと、そんなことではない。「参りました！」ということですよ。

●私と一緒にパラダイスだ

²⁴之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。

「汝らは己が罪のうちに死んでしまうぞ」

と。罪というのは、離れていることが罪なんだ。キリストから、神さまから離れていることが罪の罪たるところです。この言葉、この行為が善い悪いのと、そんなことではない。離れていることです。これが「原罪」というやつだ。神のもとを離れて木の下に隠れた。これがはつきり表している。

とにかく、あの神話は素晴らしい神話です。我々の現実をちゃんと語っている神話です。お伽話のような形で言いながら、もの凄い真理を表している。イソップや何かもそうなのな。聖書はそうなんだ。「脱神話」なんて言う必要はない。脱神話どころじゃない。神話を本当の意味で尊ばなくては。

「^{つかわ}遣し給いし」

と、キリストは言う。キリストの自覚は本当にそうなんです。何も自分ではないんだ。と。
「汝の御意をどうぞ成してください。私をどうぞお使いください」

「御意を成させ給え、我を通して」

とキリストは仰らないけれども、

「我を通して成してください」

ということですよ。

「我が意志にあらず、汝の意志なり」

と。これが本当に強いんです。これが本当の自由の世界です。

ところが、普通の自由だの自主だのと言っているいわゆる民主主義なんていうやつは、そういう境地が全然分らない。民主の奥に神さまを主としている神主の世界がないから。本当に日本はしょうがないね。教育者がそういう境地を持たないから、教育なんかできっこないですよ。少年の非行とか何とかかんとか言うけれども、もとは親と教師が責任を負



わなくてはいいかん。そんなふう子育てたのは誰だというわけだ。本当ですよ。本当は胎教から始まる。お腹の中にあるときにも、お母さんの心の在り方でもって、それがもう言葉以上の世界が伝わっているんです。おそろしいです。

汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』

「我の夫なる」の「それ」という言葉は、

「私が本当の贖い主、メシヤだぞ」

ということ。

「私がメシヤであることを受けとらないかぎり、みんな地獄往きになってしまうぞ。

サタンに捕らわれてしまうぞ」

と。「罪・死・サタン・黄泉」、これを四位一体という。別な四位一体は、「神・キリスト・聖霊・我」、これが光の四位一体です。「四位一体」なんてあまりまだ人は言わないけれども、これは本当にそうです。そうならなければしょうがないじゃないか。ただ三位一体みたいなことを言ってたって何もならない。「その中に罪びとを入れてやろう」というのがキリストじゃないですか。

イザヤ書57章15節に、

「¹⁵至高く至上なる永遠にすめるもの聖者となづくるもの如此にい給う、我はたかき所きよき所にすみ、亦こころ碎けてへりくだる者とともにすみ、謙だるものの霊をいかし、碎けたるものの心をいかす。」（イザヤ57・15）

とある。上から下降してくる。そして、碎けた心の人たちの中に入ってくる。お高くとまっている神さまではないぞと。その「碎け」の碎けは十字架です。「碎けた心」なんて言ってたって、我々の碎けは当てにならない、ヘタすると。

十字架上の片一方の盗賊は、

「お前は神の子なら、救ったらよからう」

と言った。この傲慢な奴は地獄往きです。もう片一方は、

「私たちはさんざん悪いことをしました。私たちはもう仕方がない。しかし、あなたはちっとも悪いことをなさらないのに。せめても、御国を来らせるときに、私を覚えてください」

と言ったら――これは碎けた心だ――キリストは、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と言われた。人類を二つに分けるのは、この二つの十字架が表している。天国往きか地獄往きか。素晴らしいコントラストです、これは。

●死から生命に

²⁵彼ら言う『なんじは誰なるか』



相変わらずこんなことを言っている。

イエス言い給う『われは正しく汝らに告げ来りし所の者なり。²⁶ われ汝らに就きて語るべきこと審くべきこと多し、而して我を遣し給いし者は真なり、我は彼に聴きしその事を世に告ぐるなり』

「もうさんざん今まで言っているではないか。何、今ごろ寝ぼけたことを言うか」と、キリストなら仰りたいところだよ。

ヨハネ伝5章22節から、

「²²父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。²³これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は之を遣し給いし父をも敬わぬなり。²⁴誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。」(ヨハネ5・22～24)

これが非常に決定的な言葉です。

「私の言を聞いて、遣わし給いし者を受けとる人は、永遠の生命を持つて、もう審判には至らない。死から生命に移ってしまったのだ」

と。キリストのお言葉はいわゆる神学の範囲になんか入らないですよ。神学というやつは組織的に構成したつてダメなんです、本当の神学は。私の神学は、神学を嘲る神学です。霊学、とでもいいいたい。

これが正に、「正しく汝らに告げ来りし所の者なり」の内容です。

²⁷これは父をさして言い給えるを、彼らは悟らざりき。

「遣わし給いし者、父なる神」のことが相変わらず分からない。「父」という言葉は大体、旧約ではさっきの第二イザヤ書に出てきます。

²⁸爰にイエス言い給う『なんじら人の子を挙げしのち、我の夫なるを知り、

「人の子を挙げしのち」というのは十字架ですよ。十字架にかけたのち、我のメシヤであることを知り、

又わが己によりて何事をも為さず、

そうでしょ。自分では何もしない。神さまにやらせられている。自分は何も言わない。神さまに言わせられているんだと。

ただ父の我に教え給いしごとく、此等のことを語りたるを知らん。

ところが、キリストは挙げられたつて、これにみんな躓いてしまった。弟子たちまでも。キリストが甦つて、やつと目が覚めた、多少。まだダメです。

「お前たち、もう少ししっかり祈つて待っている。聖霊が来たら、お前たちは、私が言ったことしたことが全部そのうちに分かるぞ」

というわけですよ。



29 我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意に適うことを行うに
よりて、我を独おき給わず』

全くその通りです。

「エン・クリスト」です。クリストの中にあつて動くのでなかったら。これはいつも申し上げている通り、クリストの中に祈り入ってください。全身を投入して祈ってください。投げ入れの祈りです。信仰の現実、

「共にあり、中にある」

という世界です。「神さまの子である」ということをただ信じていたり、「十字架の贖い」という命題をただ信じているのではダメだ。それは観念信仰だ。

「我を遣し給いし者は我とともに現に在す。我はつねに御意を行わさせられている」と。自分で行ってもいない、行わせしめられている。全部、受け身です。

30 此等のことを語り給えるとき、多くの人々イエスを信じたり。

やつと分かった。けれども、まだ本ものではないですよ。本ものは使徒行伝のペンテコステ以来。あれを通らないと本ものにならない。

●クリストよりクリストへ

パウロは、

「信仰にあつて義とされる」

ということを非常に言いました。ヨハネは、

「信仰にあつて生命に入る」

と、非常に生命的ですね。いいんですよ、いろいろな使徒たちがいろいろなことを言つて。ただし、それは全部、渾然として一つになる。

「汝何処におるや」

と問われたときに、

「あなたの中に」

と、これが答えられなくてはいかんというはなしです。

パウロは凄いことを言うね、ローマ書11章32節、

「32 神は凡ての人を憐まんために凡ての人を不順の中に取籠め給いたり。

罪の中に押し込んでいたと。これは本当の憐れみが分かるために。

33 ああ神の智慧と知識との富は深いか、その審判は測り難く、その途は尋ね難し。34 『たれか主の心を知りし、誰かその議士となりし。

これもイザヤ書の言葉です。

35 たれか先ず主に与えて其の報を受けんや』36 これ凡ての物は神より出で、神によりて成り、神に帰すればなり、栄光とこしえに神にあれ、アアメン。」(口



マ11・32～36

神からやって来て、神によつて成り、また神へ帰り行く。「より出でて、また」に帰り行く。行くも帰るも同じこと。グルグルグルグル回転している。これは「キリスト者の自由」の第30節の最後のところでそのことも言っている。神さまのところに行つてまた下りてきて、これが回転するのは、隣人に救いを与えんがためです。そしてまた昇つてまた降つて、昇り降りする。ヤコブの梯子^{はしご}みたい。大体、この円環関係というのは大事なことです。

また、私は「幕屋」ということを言っている。三角錐体。a b cの三角形の底面に神・キリスト（GX）の大黒柱が立っている。このa b c関係はこの大黒柱と結ばれていて、この空間は聖霊の空間。これが幕屋の本質です。旧約の幕屋とは違う。ヨハネ黙示録の最後のところの、

「神我らと共に、我ら神と共に」

というあの幕屋の世界ですね。

要するに、さきほどのヨハネ伝3章のニコデモではないが、新しく新たに生まれるということは何処から生まれるか。十字架を通して聖霊によつて新たに生まれて、またキリストのもとへ常に新たに帰る。ルターがああ95箇条で、

「クリスチャンの生涯は悔改の連続である」

と言った。日に日に帰り行くことは、日に日に前進すること。回り^{めぐる}帰る。回帰。正に「永劫回帰」だ。ニーチェじゃないけれども。

そういうようにして、私たちは、「何処より何処へ」はいや実には「何処にあるか」である――まん中の大事なこと――まん中の大事な「何処に」を持つているから、「何処より何処へ」というのは、本当の

「キリストよりキリストへ」

ということ。キリストから出てキリストに帰っていく。それが本当に神における在り方ということになりましょう。

あとは毎日、自分で体験するだけのなし。まあ聖書は要するに、日常生活で食らって消化していなかったら、いくら語つても聞いてもつまらないことだ。それでおしまい。

